

## 情緒状態と自我の情緒的統制機能について

— 不快な情緒状態におけるイメージと  
「動き」の投影による分析 —

門 前 豊志子

A Study of Emotionally States and the Ego Function  
—The Analysis of the Relationship between Imagery Contents and  
Projective Movements on the Emotionally Uncomfortable State —

Toshiko MONZEN

### 問題

個体が内的に不快な情緒状態に置かれた場合、その不快感を解消しようとする自我の働きが想定される。不快感の解消の仕方、方法の一つとして、内的不快感を外界に投影して解消する場合が考えられる。内的情緒の外界への投影を知る有効な方法として、投影法がある。投影法による反応内容の分析は、内的情緒を理解するうえで臨床的に有意義な役割を担っていることは周知の事実である。なかでもロールシャッハ法（以下ロ法と略記する）は、自我機能の柔軟性・現実吟味の程度や情緒的統制力の適切さなどを捉える指標をもつ測定法として、臨床の有効性が確認されている。筆者は、自我心理学による投影の考え方の立場から、自我の情緒的統制機能を「動き」とイメージ内容との関係で実験的に捉えることで、防衛機制としての投影のメカニズムの一端を理解する手がかりを得ることができるのではないかと考えてきた (Klopper, B. 1956; Haltmann, H., 1964; 片口安史 1990)。

投影のメカニズムを捉えるときに、ロ法の図形刺激の曖昧さが個体の内的情緒の投影を促し、

個体の情緒的側面を理解する手がかりとなることは明らかであるが、曖昧な図形刺激のどの要因（形態・色彩・陰影要因）が影響を与えているのかを特定することが困難であると考えられる。なぜなら、ロ法の反応は、それらの要因が複合的に認知され関連づけられた結果、図版への反応として表出されると考えられるからである。したがって、図形刺激の性質を曖昧でない刺激に限定して検討することによって、内的情緒状態に影響を与える外的刺激要因の性質を明らかにすることができると考えられる。自我の情緒に対する統制機能については、外的刺激によって想起されたイメージ内容と外的刺激に投影される「動き」の有無を指標として捉えることで自我の情緒への統制機能の柔軟さをとらえることができるのではないかと考えられる。この自我の情緒的統制機能による内的情緒への対処の仕方を知ることによって、臨床場面における個の情緒的行動を理解するのに役立つのではないかと考えられる。

情緒に関する先行研究をみると、情緒と自我機能との関係については投影法を中心に臨床的

観点からなされてきている。情緒そのものについての研究は実験的研究が多い。それらの研究では、情緒の質を捉える研究と情緒ないしは感情の測定尺度について検討する研究に大別される。情緒の質に関して、Bradburn (1969) は、主観的に幸福と感じる情緒について、肯定的感情と否定的感情の2つの次元について各5項目からなるスケールを作成して検討した結果、2つの次元間の相関は非常に低いが、同一感情内の5項目間の相関は、非常に高いことが認められたとしている。Bradburnの追試をしているDiener, E., & Emmons, R. A. (1985)によると、否定的・肯定的感情の関係は、個体がそれらの感情に支配されている時間的な長さに依存するとしている。これら両者の感情は逆比例的に変化して、同時に異なる二つの感情を一人の人が生じさせることはできないとしている。さらに、個体の感情の統制の仕方として、ある一つの強い感情（例えば、肯定的感情であれば）が優先して生じると、他方の感情（否定的感情）は抑制されるメカニズムがあるかもしれないと考えて、同時に異なる性質の感情を意識することはできないと示唆している。この考えに対して、Russell (1979) は、肯定的・否定的感情は瞬間的な情緒の基本的な次元と考えられるとして、同時に二つの感情を感じることができるとする考えを提唱している。Plutchik (1980) も、非常に強い情緒に支配されたときには、一方の極のみが生じるが、しかし、特殊な肯定的・否定的要素を共に含む混合された情緒を同時に感じることができるとしている。

これらの研究から、情緒は単一の感情として捉えることはできないが、快と不快の異なる次元で捉えることができると考えられる。

他方、感情の測定尺度について研究しているSjobergら(1979)は、Cattell (1966)、Nowlis (1965)らの研究を土台にしながら、感情の測

定尺度についてチェック・リストを中心に検討している。彼らによると活動性—非活動性、肯定的—否定的な社会への方向づけ、統制—非統制と快—不快の4対の測定尺度を仮定している。これらの尺度は非常に単純ではあるが、個体の情緒状態を測定する上で効果的であることが報告されている。上述のNowlisは、感情尺度で12の因子を抽出しているが、両極の次元で情緒をとらえられるという考えは支持されなかったと報告している。両極に位置する情緒を表す単語、たとえば、喜びと悲しみのような両極に位置する情緒的単語の場合、実際の気分の上では、必ずしもその気分だけが単独で区別されて感じられているとは限らないという指摘がなされている。この点は注目すべき示唆であり、感情を尺度でとらえ、研究する上での困難さと限界を暗示している。寺脇・岸本・古賀(1992)は、大学生及び成人を対象に感情を測定する多面的感情尺度を作成し、8因子から成る感情の構成因子を抽出している。これらの尺度は臨床場面にも適用できる可能性があるとして述べられているところからも情緒の質を測定する尺度として今後、更に臨床的な適用が期待されるものではないかと考えられる。

情緒とイメージの関係における先行研究では、イメージ内容を検討するというより、情緒を表す単語から連想される気分を調べて、気分の持つイメージを捉えることに力点が置かれてきた(Nowlis, 1970 ; Sjoberg, 1979)。単語からの連想ではなく、12枚の幾何学図形刺激に対するイメージ内容について検討した門前(1984)の実験では、情緒的な不快感は、暗い・重いなど不快な情緒の直接的表現としてイメージ内容に投影されるとしている。さらに、図形刺激の性質と個体の情緒的要因との関係を検討することによって内的情緒への自我の統制の仕方が明らかになるのではないかとしている。また、前述

の図形刺激の刺激特性として快・不快の刺激価について因子分析をもちいて検討した結果、黒色円形図形、黒色三角形など黒色の色彩をもつ図形が、色彩をもたない形態のみの同一図形に対するよりも不快な感じを多く投影することが判明したとしている(門前、1985)。従って不快感を喚起させる図形刺激の性質としては、形態よりも黒色の色彩に帰因することが明らかになったといえる。不快感の質とイメージ内容について検討している門前(2002)の結果では、不快感、嫌悪感に代表される感情が主となっていることを明らかにして、それらの感情は不快なイメージ内容として想起されて外界(図形刺激)に投影されると述べている。

筆者は口法の考えを踏襲しながら、情緒状態と「動き」の投影について実験的に検討を重ねてきているが、本研究では、その一環として、不快な情緒状態における自我の情緒的統制機能による不快感への対処の仕方について、「動き」の有無とイメージ内容との関係から検討していきたいと考えている

### 目的

不快な情緒状態において喚起された内的不快感と外的刺激によって喚起された不快感との両方に対する自我の情緒的統制機能による対処の仕方について、イメージ内容と「動き」の投影の有無との関係から分析することを目的とする。不快感の解消として、「動き」やイメージを投影する場合と、投影しない場合における自我の情緒的統制機能を検討することで、不快感への対処の仕方の特徴を捉えることができればと考えている。

### 仮定

①不快な情緒状態で「動き」の投影を伴うイメージ内容の表出の場合には、不快な情緒への自我の情緒的統制機能が抑制されず柔軟に働いているのではないだろうか。②「動き」の投影が

伴わないイメージ内容の表出では、不快感に対する自我の情緒的統制機能に抑制が働いているのではないだろうか。

### 方法

本研究の目的を検討するために、以下のような方法での実験計画をたてた。

#### 実験 1

**目的** 不快な情緒状態における不快感に対する自我の情緒的統制機能での対処の仕方について、「動き」の投影の有無とイメージ内容の関係から実験的にとらえることを目的とする。

#### 方法

**被験者** 被験者(女子短期大学の学生、平均年齢19.5才)を以下のように実験群と対照群の各2群ずつ4群に分ける。

**実験群**：UC 1群(不快な情緒状態で黒色図形刺激を呈示される群)20名。

UC 2群(不快な情緒状態で灰色図形刺激を呈示される群)14名。

**対照群**：N 1群(黒色図形刺激のみを呈示される群)15名。

N 2群(灰色図形刺激のみを呈示される群)12名。

**図形刺激** 直径7 cmの黒色円形図形と灰色円形図形をスライド版に作成したものを使用する(図1参照)。

**不快な情緒状態の設定** 不協和音3小節からなる音刺激によって、不快状態に誘導する。

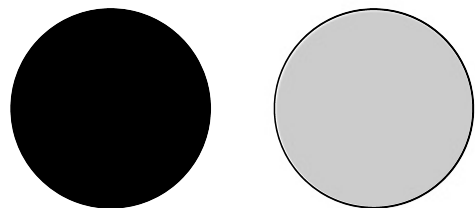


図1. 図形刺激

A ♩ = 40 協和音のカデンツ

B ♩ = 40 不協和音のカデンツ

L. M. [WOOD 8'... 3  
HORN 8'... 3  
Vib. ... 1  
BRILLIANCE... 0  
REVERB ...  
MAN. BALANCE ...

I IV V<sub>7</sub>の和音によるカデンツ  
エレクトーン C-10使用

図2. 情緒状態へ誘導する音刺激（本実験では B を使用）

この音刺激はメロディのない不協和音のカデンツで、矢田部 宏氏（作曲家・元平安女学院短期大学教授）によって作曲されたものを作曲者自身のエレクトーン演奏によってテープに録音されたものを使用する。この録音テープは、調整技師（ミキサー）によって柔らかい音質に調整されたもの（strings）を使用する。この音刺激が不快感を強く喚起させることは、既に実証済みである（図2参照）。

**実験手続き** UC 1 群と UC 2 群は、それぞれ音刺激によって不快な情緒状態に誘導される。UC 1 群は黒色円形図形刺激がスクリーン上に映写されて呈示される。UC 2 群は灰色円形図形刺激が同様に呈示される。N 1 群は音刺激がない状態で、黒色円形図形刺激のみがスクリーン上に呈示される。N 2 群も灰色図形刺激のみが同様に呈示される。

各群は実験室の前方、中央スクリーンの前から 5 m 離れた位置に 1 列10名ずつ規

則的に並ぶよう指示される。記録用紙の配布後、実験の教示が以下の様になされる。

①各群ともスクリーン上に映写された図形刺激を 5 秒間凝視するよう指示される。② 5 秒後、図形刺激が消された後、3 分間に実験前に配布した手元の「動きとイメージ内容」の記録用紙に、「動き」の程度（動きを感じないから「動き」を感じるまで 4 段階尺度）・「動き」の速さ（動きが速い・ふつう・遅いの 3 段階尺度）および「動き」の方向性（方向を示す矢印か文字で）とイメージ内容を言語で記入するよう指示される。③この試行を 5 試行行うよう指示される。「動き」の速さと「動き」の方向性については、「動き」を感じた被験者のみ評定するよう説明される。

実験群に与えられる音刺激は、実験開始 15 秒前から実験終了後 15 秒まで実験室後方のスピーカーから中程度の音量（50db）で実験中継続して流され、被験者に不快な情緒状態を持続するように設定された（実験

開始から実験終了までの時間は15分55秒である)。

## 実験 2

**目的** 実験 1 で得られたイメージ内容について快・不快の程度を評定することを目的とする。

## 方法

**被験者** 実験 1 とは別の女子短期大学生122名 (平均年齢19.5才)。

**実験手続き** 実験 1 で得られたイメージ内容について重複するイメージ内容を省いた項目のイメージ内容をランダムに記録用紙に記載し、各項目ごとに快から不快まで5段階評定で評定するよう指示される。

**イメージ内容の評定** 5段階評定で評定されたイメージ内容の各項目の快・不快の程度について平均値を算出して、それらを基に快・不快の程度を評定者2名の合意のもとに、快から不快までの5段階に分類する。基準として、快2は平均値1.5以上、快1は平均値1.5未満～0.5以上、中性は0.5以上～-0.5未満、不快1は-0.5以上～-1.5未満、不快2は-1.5以上とする。ここで中性

のイメージ内容とは、快でも不快でもないイメージ内容を意味する。

## 結果

まず、実験 2 で得られた結果について報告する。実験 1 で得られたイメージ内容の項目を整理した結果、101項目が最終的に選ばれた。101項目のイメージ内容について、快・不快の評定基準を基にイメージ内容を評定し分類した結果は、表 1-1 から表 1-3 に示す通りである。これらの結果から快2のイメージは暖かさ・柔らかさなど情緒的に快的な気分を表す内容が多く、快1のイメージは、自然現象・風景や事物などのもつ快的な印象を表す内容が多い。不快なイメージ内容では、不快1では、すいこまれる・暗い・冷たいなど情緒的に不安な気分を表す内容が多い。不快2では、孤独・違和感などの抽象的な不快感のイメージ内容と怖い・嫌い・気持ち悪いなど具体的な不快感を示すイメージ内容が多いことが分かる (表 1-1 ～表 1-3 参照)。

次に、実験 1 の結果について報告する。検定はいずれも統計ソフト spss. ver. 11で分析を行

表 1 イメージ内容の快・不快の分類結果

表 1-1 快のイメージ内容

快2を示したイメージ内容 (平均値1.5以上)		快1を示したイメージ内容 (0.5以上～1.5未満)	
1. 明るい	9. ケーキ	1. 大きい	16. 好きなもの
2. ふわつとした	10. すきとおる	2. 光る	17. 夕暮れ
3. 宇宙の星	11. あたたかい	3. 広がる	18. 円い感じ
4. 月	12. レコード	4. 太陽	19. ドラえもんの頭
5. かわいい	13. CD	5. 木星	20. 洋かん
6. 柔らかい		6. 宝石	21. あんぱん
7. 風		7. ステンドグラス	22. サンドイッチ
8. つつまれる		8. パラグライダー	23. 日食
		9. 波	24. 拡大するかんじ
		10. 窓	25. 折り紙
		11. 風車	26. お団子
		12. 風船	27. 飛ぶ
		13. オルゴール	28. 拡大する動き
		14. 夕焼け	29. ドーナツ
		15. おもちゃ	30. 軽い

った。

図形刺激に対する「動き」の投影の有無の5  
試行別4群間を分散分析で検討した結果は、図

表1-2 中性のイメージ内容

中性のイメージ内容 (0.5以上～0.5未満)		
1. 扉	16. タイヤ	31. 神聖さ
2. 小屋	17. 図形	32. 静か
3. 鳳	18. 影	33. 真上に動く
4. 砂時計	19. 砂山	34. 斜めに動く
5. 石	20. 塗り壁	35. 左右に動く
6. 人工衛星	21. 池	36. ふくらむ
7. 球	22. 岩	37. 遠いかんじ
8. マーク	23. カメの甲羅	38. こま
9. 紙	24. 円盤	
10. 秘密	25. ヒトデ	
11. 布	26. 日の出	
12. 水たまり	27. 地球	
13. 遠い	28. ふた	
14. ワラビ	29. 浮ぶ	
15. 砂漠	30. メロン	

3・図4に示す通りである。第3試行(N1群<N2群、UC2群<N2群)と第5試行(N1群<UC1群)に分散分析でそれぞれ有意差が認められた( $p<.01$ ; $p<.05$ )。

イメージ内容得点の試行別4群間の結果について反復測定で検討した結果、第4試行と第5試行でUC1群とUC2群に有意差が認められた( $p<.05$ )。UC1群が4群中最も不快な内容を多く示し、UC2群は4群中最も快の内容を多く示すことが分かった。

「動き」の投影の有無とイメージ内容との5試行別4群間について、対応のある二元配置分散分析で比較検討した結果、有意差が認められた( $F(4,3)=3.522, p<.05$ )。

「動き」の投影の有無とイメージ得点について

表1-3 不快なイメージ内容

不快2のイメージ内容 (-1.5以上)		不快1のイメージ内容 (-0.5以上～-1.5未満)	
1. 孤独	11. 痛い	1. すいこまれる	18. マンホールの穴
2. 違和感	12. 底なしの穴	2. 無気力	19. 井戸
3. 怖い	13. 棺桶	3. あわただしい	20. 黒い幕
4. 固い	14. お化け	4. 暗い	21. トンネル
5. 重い	15. 蜂の巣	5. 不気味	22. ネズミの巣
6. 嫌い		6. 闇	23. 砂嵐
7. 取り残される感じ		7. どっしり	24. 恐竜の卵
8. 不安		8. 冷たい	25. 潰れたボール
9. おどろおどろ		9. 悲しい	26. 影
10. 気持ち悪い		10. 厳しい	27. 沈んだ
		11. 爆発	28. 黒い
		12. 怒る	29. 突出する動き
		13. 迫る	30. 引っ込む感じ
		14. ささる	31. 真下の動き
		15. 黒い球	32. 上下の動き
		16. 灰色	33. 回転する感じ
		17. ブラックホール	

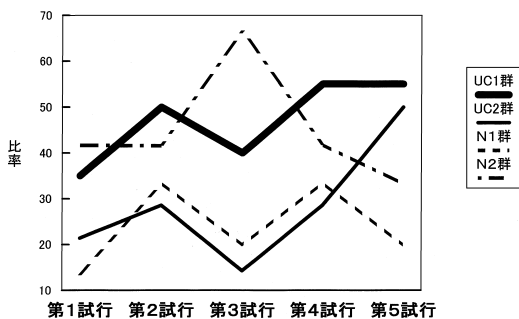


図3. 「動き」の投影がみられた4群間の比較結果

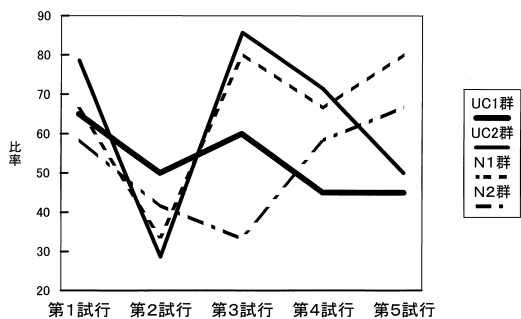


図4. 「動き」の投影がみられない4群間の比較結果

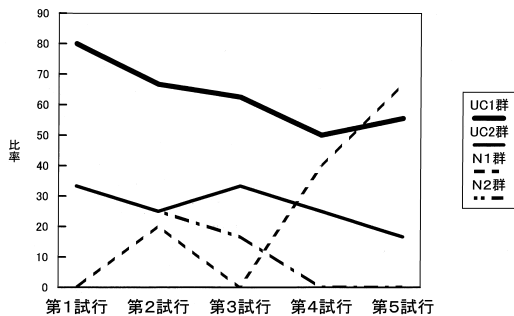


図 5. 「動き」の投影が有る 4 群の不快イメージの出現率の比較

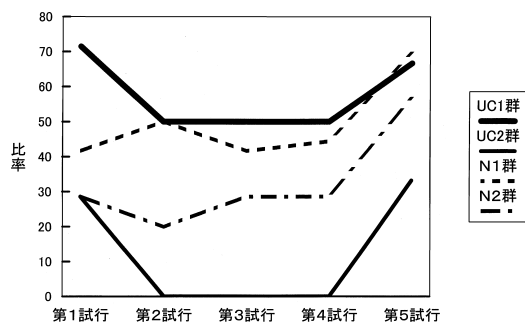


図 6. 「動き」の投影が無い 4 群の不快イメージ出現率の比較

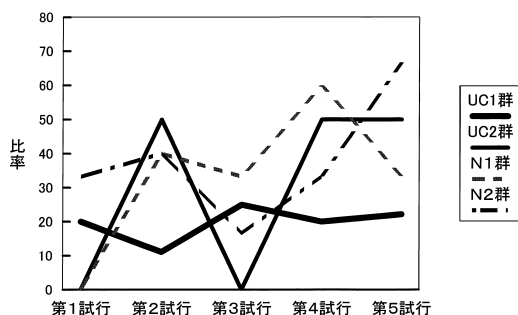


図 7. 「動き」の投影が有る 4 群の快イメージ出現率の比較

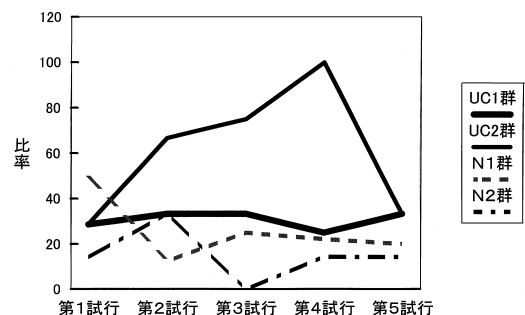


図 8. 「動き」の投影が無い 4 群の快イメージ出現率の比較

5 試行別 4 群間を、各試行ごとに一変量の分散分析で比較検討した結果、第 2 試行・第 3 試行と第 4 試行にそれぞれ有意差が認められた。まず第 2 試行では UC 1 群の「動き」の投影の有る群が UC 2 群の「動き」の投影の無い群に対して不快 1 のイメージ内容で有意差が認められた ( $p < .05$ )。第 3 試行の結果では、「動き」の投影が有る群間の比較結果で、不快 1 のイメージ内容の出現において UC 1 群  $>$  N 1 群、UC 2 群  $>$  N 1 群で有意差が認められた ( $p < .05$ )。「動き」の投影の無い群間との比較結果では、N 2 群  $>$  UC 2 群で不快 1 のイメージ内容に有意差が認められた ( $p < .01$ )。「動き」の投影の有る群と無い群間の比較結果では、UC 1 群の「動き」の投影の有る群  $>$  UC 2 群の「動き」の投影の無い群、N 2 群の「動き」の投影の無

い群  $>$  UC 1 群の「動き」の投影の有る群で、UC 2 群の「動き」の投影の有る群  $>$  UC 2 群の「動き」の投影の無い群で、それぞれ不快 1 のイメージ得点が有意に高かった ( $p < .05$ )。「動き」の投影のある UC 1 群、UC 2 群は共に不快 1 のイメージ得点が高いことが分かった。N 2 群は「動き」の投影の無い群で不快 1 のイメージ得点が高いことが分かった。第 4 試行の結果では、「動き」の投影の有る群で、N 1 群  $>$  UC 1 群で快 1 のイメージ得点に有意な差が認められた。「動き」の投影の有る群と無い群の比較結果では、「動き」の投影のある N 1 群  $>$  「動き」の投影の無い N 2 群と UC 1 群で、快 1 のイメージ得点が有意に高かった。「動き」の投影のある N 1 群は「動き」の投影の無い N 1 群・N 2 群に比して快のイメージ内容が多かった。このこ

とは黒色図形刺激に対する不快感が動きによって解消され快のイメージに転化されていることを示しているのかもしれない。また、不快1のイメージ得点は「動き」の投影の無いN2群>「動き」の投影の有るUC1群であったことから、UC1群は動きを投影することで不快感を解消をしているのではないかとということと、灰色図形刺激が不快感を喚起させる図形刺激となっていることが分かった(図3～図8参照)。

### 考察

以上の実験1、2の結果から、仮定で考えたこと及び自我の情緒的統制機能について検討し考察する。

#### 不快感を喚起させる外的刺激がイメージ内容と「動き」の投影に与える影響について

実験群つまり内的に不快群(UC1群とUC2群)と対照群つまり内的に非不快群(N1群とN2群)の図形刺激に対する動きの投影の有無をみると、まず第1にN2群が第3試行で、4群中最も多く「動き」の投影をしていることと、第2に、内的不快群が第5試行で内的非不快群に対して有意に高い「動き」の投影を示していること、また、「動き」の投影の変化を試行回との関係でみてみても、内的不快群が内的非不快群に比べて、第4・第5試行で「動き」の投影が有意に高くなり、内的非不快群は有意に低い結果を示していることが分かった。これらのことから、内的不快群は、不快な情緒に対してすぐに「動き」の投影で不快感を解消するのではなく不快な情緒を抑制する働きから解消する働きへと変化していくプロセスをたどると考えられる。前述の結果からも明らかであるが、第1試行の4群間では「動き」の投影の有無に有意差が生じていないが、第3試行・第4試行を分岐点にして内的不快群と内的非不快群に第1試行とは逆の現象が認められている。これら

のことから、不快感が内的・外的に持続する状況では、不快感を動きによって投影して解消させていくのではないかと考えられる。内的非不快群では、N2群の結果が示すように、灰色図形刺激の方が黒色図形刺激よりも「動き」の投影が促されやすい刺激特性を持つといえる。黒色図形刺激では、灰色図形刺激とは異なり、内的な不快感が「動き」の投影ではなくイメージの投影で解消されていることが分かる。これらから、黒色・灰色の両図形刺激によって喚起された不快感は、「動き」の投影を促す場合と「動き」の投影を促さない場合があり、「動き」の投影が促されない場合には、不快感の強いイメージ内容への投影が多く認められた。内的不快群のUC2群では、UC1群とは異なり、「動き」の投影がない群では不快なイメージの出現率が低く、「動き」の投影のある群では快や中性のイメージ内容の出現率が高い特徴を示している。このことは灰色図形刺激では内的不快感を解消する場合に、「動き」の投影がある群とない群を比較すると「動き」の投影のある群で快のイメージ内容が多い。灰色図形刺激では、黒色図形刺激とは異なり不快感を抑えずに不快感の解消として「動き」の投影が促されると同時に、イメージ内容は、不快から中性や快の内容へと置き換わっていることが分かる。したがって、黒色と灰色の図形刺激では個体が不快感を喚起させられる程度に違いがあり、それに伴って不快感への対処の仕方が「動き」の投影の有無とイメージ内容に反映され则认为て良いであろう。

#### 不快状態における自我の情緒的統制機能と「動き」の投影・イメージ内容との関係について

前述したように、個体が内的に不快な情緒状態に置かれると「動き」の投影と不快なイメージ内容を多く表出することが認められた。特に内的・外的に不快感の強い状態が持続する場合に、自我は内的不快感を抑制する働きにとどま



表 2 不快感に対する自我の情緒的統制機能の図式

表 2-1 内的・外的不快状態と自我の情緒的統制機能の関係

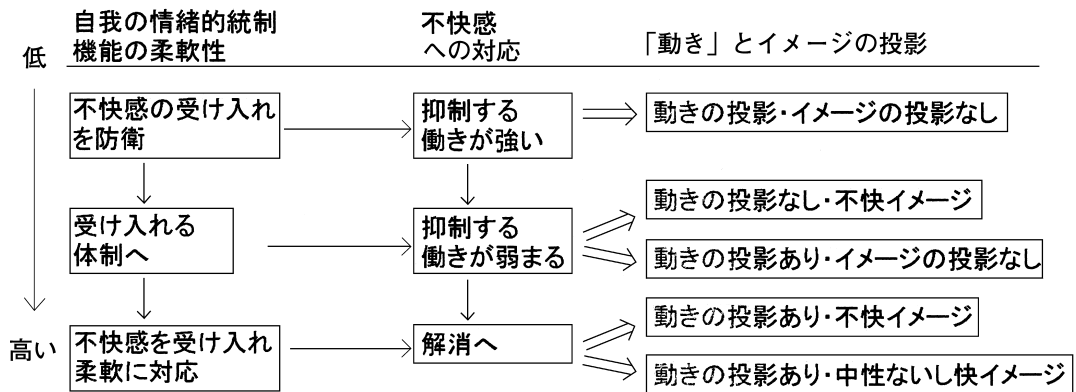
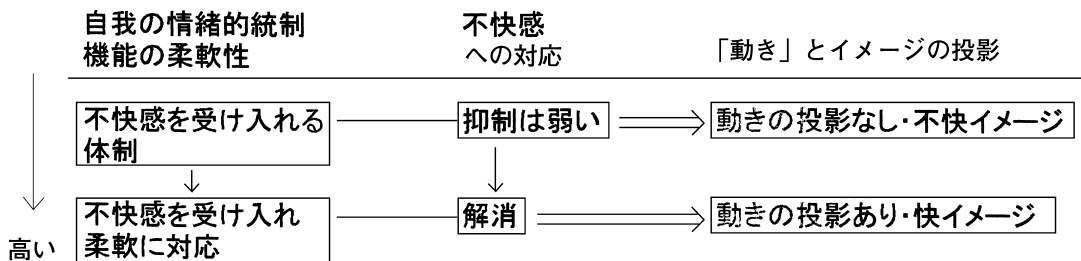


表 2-2 外的不快状態と自我の統制機能の関係



ることができずに、「動き」の投影と共に不快なイメージ内容を投影することによって、不快感を解消する働きになるのではないかと考えられる。このことは、自我が不快感を「動き」の投影によって解消しようとする場合の自我の情緒的統制機能による統制機能の段階を示唆しているのではないかと捉えられる。「動き」の投影の有無とイメージ内容と自我の情緒的統制機能の関係を図式化すると表 3 の様にまとめられる。不快感に対して自我が不快感を受け入れず、不快感を抑制する場合には、「動き」の投影もイメージの表出もみられないが、自我が不快感を抑制する働きを弱めるにつれて「動き」の投影やイメージ内容の表出がなされる。自我が不快感を受け入れて解消するに応じて、「動き」の投影とイメージの両方に対処する自我の情緒的統制

機能の柔軟さが顕著となると考えられる。内的不快感が強くない状態では、不快感を不快なイメージの投影で解消する段階をへて、「動き」とイメージの投影で対応する働きがみられ、強く抑制する働きはみられないことと、イメージ内容が不快な内容だけではなく快の内容に置き換えられて不快な刺激を快に転換する自我の柔軟な対応がみられることが特徴といえる(表 2-1～表 2-2 参照)。

**仮定の検討** 以上のことから、仮定として考えたことについて検討すると、外的刺激によって惹起させられた内的不快感への自我の情緒的統制機能による対処の仕方と、外的刺激と内的不快感の二重の不快感に対応せざるをえない自我の情緒的統制機能による対処の仕方という二通りを考える必要があることが分かった。個体が

内的不快感を感じる程度と不快感に対する情緒的統制機能による対処の仕方において、「動き」とイメージ内容の表出結果から自我が不快感を感じる程度との関係で不快感を抑制する仕方が異なるという仮定は大筋では認められたといえるが、不快感を抑制する段階から解消する段階へと移行していく段階的過程があることが新たに分かった。個体の不快感に対する対処の段階はどの段階であるかを判断する指標として、「動き」の投影の有無とイメージの快・不快内容の表出の程度が考えられることが分かった。したがって、「動き」の投影の有無だけで不快感が解消されるのではなく、イメージ内容との関係で把握する必要が示唆された。具体的には、外的刺激だけで不快感が生じた場合には、不快感を不快なイメージ内容で直接表出して解消する処理の仕方が顕著に認められた。これは自我が不快感を抑制せずに受け入れて対処した情緒的統制の仕方がなされたと考えられる。外的・内的に二重の不快状態に個体が置かれる場合には、不快なイメージ内容に加えて、「動き」を投影する働きによって、内的不快感を解消していく自我の対処の仕方と、不快感を強く喚起しない外的刺激の場合には、「動き」の投影と共に、不快感を受け入れながら、外的・内的不快感を中性的な、または快のイメージに置き換えて対処する仕方があることが捉えられた。

#### 要約

1. 不快な情緒状態において想起されたイメージ内容について、投影的な「動き」の有無とイメージ内容を分析することから、自我の情緒的統制機能における不快感への対処の仕方を捉えることを目的とした。「動き」を投影することによって不快感の解消が促されると仮定した考えは、認められたが、必ずしも「動き」の投影が有ることだけが不快感の解消になるとは限らないことが判

明した。

2. 自我の情緒的統制機能は、個体が不快感を感じる程度によって、あるいは、個体が不快感を抑制できる程度によって、段階的に「動き」の投影の有無とイメージ内容で不快感に対処していることが示唆された。
3. 不快感を喚起させる外的図形刺激として黒色図形刺激と灰色図形刺激を用いたが、個体が内的に不快な情緒状態でない場合には、黒色図形刺激よりも灰色図形刺激のもつ曖昧な漠然とした刺激特性の方が不快感を惹起させて、不快なイメージ内容を多く表出して不快感を解消することが分かった。黒色図形刺激では、不快感を抑制して自我を防衛する働きがあるために、イメージも想起され難いことが認められた。
4. 内的に不快な情緒状態と外的に不快な刺激の双方による不快感が惹起される場合には、「動き」による投影の働きと不快なイメージ内容で不快感を解消することが捉えられた。ただし、外的に不快な刺激の不快感の程度が自我に受け入れられる場合には、内的不快感とは、「動き」の投影の働きと共に、中性・快のイメージ内容に置き換えられて解消されることが捉えられた。

#### 今後の課題

これらの結果から得られた知見を臨床的な状況とも関連づけながら自我の情緒的統制機能と投影についてさらに検討していきたいと考えている。

**付記** 本研究の一部は日本心理学会第68会大会（2004年）で発表されたものである。

#### 引用文献

Bradburn, N. 1969 The structure of psychological wellbeing. Chicago : Aldine.

- Cattell, R. B. 1966 The scree test for the number of factors. *Multivariate Behavioral Research*. 1, 246-276.
- Diener, E., & Emmons, R. A. 1985 The Independence of Positive Affect. *Journal of Personality and Social Psychology*, 47, 1105-1117.
- Hartmann, H. 1964 Ego psychology and the problem of adaptation. International Universities Press, Inc. New York
- 片口安史 1990 新心理診断法 金子書房
- Klopffer, B. et. al 1954 Developments in the Rorschach Technique. World Book Company.
- 門前豊志子 1984 彩色・無彩色図形におけるイメージの投影について 信州豊南女子短期大学 第1号 55-72.
- 門前 豊志子 1985 彩色・無彩色図形における刺激特性について—因子分析による試み— 信州豊南女子短期大学紀要 第2号 105-120.
- 門前 豊志子 2002 不快な情緒状態において想起されたイメージと不快感の関係について—実験的アプローチ— 秋草学園短期大学紀要 第19号 158-168.
- Nowlis, V. Research with the Mood Ajective Check List. In S. S. Tomkiss & C. E. Izard (Eds.) 1965 Affect, cognition, and personality. New York : Springer.
- Plutchik, R. 1980 Emotion : A psychoevolutionary synthesis. New York : Harper & Row.
- Russell, J. A. 1979 Affective Space is Bipolar. *Journal of Personality and social Psychology*, 37, 3, 345-356.
- Sjoberg, L., Svensson, E. & Person, L. 1979 The Measurement of mood. *Scandinavian Journal of Psychology*, 20, 1-18.